



和歌山県 紀和病院

日本人女性のおよそ16人に1人が罹患するとされる乳がん。再発への不安や、進行した場合の闘病生活を乗り切るには、精神面でのサポートが大切だ。高野山麓にある医療法人南労会・紀和病院(和歌山県橋本市)では、宗教の力に着目し、高野山真言宗の寺院と協力した取り組みを続けている。(山田博之)

紀和病院では、これまでに高野山真言宗総本山・金剛峯寺(同県高野町)と連携し、乳がん検診の啓発バッチを製作したり、患者と家族の集いを開いたりしている。4月5日には、同宗の僧侶を招き、がん患者と家族の過ごし方について考える市民公開講座も開く。

宗教とタッグを組んだ活動を始めたのは、2011年10月。乳がん患者に、綿を生地で包んで乳房をかたどった絵馬を病院スタンプらと一緒に作ってもらい、高野山を開いた弘法大師・空海の母が住んだとされ、「おっぱい寺」の愛称で親しまれる慈尊院(同県九度山町)に奉納した。孤

「医の力の限界を補ってくれる」と宗教が果たす役割を語る梅村さん(和歌山県九度山町の慈尊院で)



独感を抱きがちな患者に、人とのつながりを感じてもらおうのが狙いだ。

同病院の乳がん専門の診療科「紀和プレスト(乳腺)センター」のセンター長・梅村定司さん(47)は、「患者は独りぼっちではない。共同作業

ん治療を願うお守りを慈尊院に依頼し、作ってもらった。お守りは縦5センチ、横3・5センチで、乳がん撲滅のシンボルカラーのピンク色をしており、患者たちにも好評という。

梅村さんは同県紀の川市出身で、世界で初めて全身麻酔による乳がん手術に成功した郷土の偉人、華岡青洲(1760~1835)にあこがれ、県立医大へ進学した。

乳がんの専門医になることを決意したのは、外科医として様々な病気の手術に携わっていた30代半ば。同年代のシングルマザーが乳がんで亡くなり、残された幼い女の子が祖母に手を引かれ、泣きながら病室を去っていったのを目にしたことだった。

「支えきれない自分だけがゆかった。悲しむ家族の姿はもう見たくない。一人でも多くの患者を救いたいと思うようになった」と言う。

ただ、「私は死んでしまうのか」と絶望にさいなまれていた患者の心を救うには、「医学の力」だけでは限界があると感じていた。

医療者には「死」医療の敗北というイメージがあり、死を肯定的に受け止めることができなかった。

そこで注目したのが、人々に安らぎを与える宗教だった。「死後も魂が減じないとする宗教なら、医療者の無力さを補ってくれるのではないかと考えた」と語る。

手術の前夜には、不安で寝付けない患者の病室を訪れ、自分で買った慈尊院のお守りを手渡している。

梅村さんは「まだまだ試行錯誤だが、今後も医療と宗教の結びつきを深めていき、患者に寄り添うパートナーであり続けたい」と力を込める。

乳がん患者ケア お守りの力 高野山と連携